

2019年

ホームページへGo!→
スマホで教室だよりが見られます



教室だより 9月号

やってみよう、やってみなければわからない

長かった夏休みも終わり、学校生活も“後半戦”に入ります。9月からは運動会や発表会、校外学習等、お子さま方が主体的に色々なことに挑戦し、達成感や仲間との連帯感を感じながら成長できる機会が数多くあります。「子どもは子どもの中で学ぶ」とも言われます。仲間から受けた刺激を、早速自分で試してみるような機会が、これから増えていくこともあるかもしれませんね。

公文式の創始者である公文公（くもん・とおる）は「やってみよう、やってみなければわからない」という言葉を遺しています。うまくいかなかったことも、やってみたからわかったのだから、失敗だと思ったら、違うやり方を試してみればよい……そんなメッセージのようにも感じます。

公文式教室はお子さま方が、自分で考え、自分で取り組む姿勢を大切にすることで、やり方を自分でつかみとろうとする意欲と態度を大切にしていきたいと考えています。うまくいったことも、いかなかったことも、それに挑戦しようとした子どもたちの心意気を、これからも認め、ほめ、はげましていく教室でありたいと思います。

公文式の創始者・公文公（くもんとおる）先生の言葉より

“「ちょうど」の学習”

公文式は、まず子どものやる気を引き出し、子ども自身がおもしろいと感じながら続けていける学習内容を渡していきます。そのために、学年という枠をはずし、それぞれの子に「ちょうど」の学習をさせるのです。

例えば、九九を5回の反復練習でマスターできる子もいれば、10回以上の練習が必要な子もいます。能力には個人差があるからです。一人ひとりがそうした能力の差に応じた学習を積み重ねていくことを、公文式はなによりも大切と考えます。子どもは、自分がスラスラできることには喜んで取り組みます。そして「もっとやりたい」「次に進みたい」という意欲をもち始めます。そういう意欲をもち、学習の成果を実感できるようになった子どもは、さらに「ちょうど」の学習内容を継続していくことで必ず伸びていきます。他人と優劣を競わせるのではなく今日はできなかったことを明日はできるように、個人別に能力を引き出していく。そのために不可欠なのが「ちょうど」の学習なのです。

2019年 9月の学習日

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
日	月	火	水	木	金	土
1	△2	3	△4	5	6	7
8	△9	10	△11	12	13	14
15	16 観音の日	17	△18	19	20	21
22	23 秋分の日	24	△25	26	27	28
29	△30					

□本市場教室学習日
△横割教室学習日

本市場教室日□

横割教室日△

保護者様へお願い。

お休みのときは電話でもメールでも結構ですので連絡をお願いします。

9月分の会費引き落としは8月28日（水）です。よろしくお願いたします。

(注)休会・退会の場合は、引き落としの関係から15日までにお申し出下さい。

教室からご家庭に連絡される生徒さんの場合は固定電話・指導者携帯電話・メール等はいずれも10円納入願います。

*学習終了後、学校の宿題をやってもかまいませんが、おしゃべりしたり、だらだらやる子は、即退出してもらいます。ご了承ください。

*ゆき子の一言コラム

子どもが家庭で本と接する機会がありますか

子どもが読書をする事は、子どもの学力をつけさせ、成績を伸ばすための王道です。ですから、できるだけ小さい頃から本を読む（読み聞かせる）ことが大切です。読書の楽しみ、喜びを感じて、成長してきた子どもは、その後も、自然に本に手が伸び、さまざまな分野の本を読もうとします。子どもは、本を読むことで、文章を知り、リズムを知り、漢字を知り、知識を得、疑似体験をします。このことは、自然に学び、学力を身につけていることになるのです。子どもに、「本を読みなさい」と言うことは、決して難しいことではありませんが、そこに説得力がなければなりません。「だって、本なんて面白くないもん」そう返ってきたとしても、今からでも遅くはありません。

本を読むことの大切さ、楽しさを教えてゆきましょう。一般に、家に本が溢れている家庭で育った子どもは、本嫌い、読書嫌い、は少ないものです。幼いときから、自然に本に接していて、それが当たり前になっているからです。皆さん方のご家庭には、どれだけ本がありますか。どれだけ子どもが本と接する機会がありますか。

もちろん、家にさほど本がなくても問題はありません。子どもと一緒に町の図書館に出掛けることで、かなりの部分解決します。そこでいろいろな本を見せる。一緒に開いてみる。面白そうな本を探させる。親が面白い本を見つける。借りてきて、一緒に読んでみる…。いくらでも可能性はあります。もう一点、親が本好きであって欲しいと言うことです。子どもは親や大人の姿を見て育ちます。本を読むことの大切さ、喜びを知っている大人が身近にいるかないかで、子どもが受ける影響は違って来るはずで、家にあるのが、なにやらセンセーショナルは見出しで埋め尽くされた雑誌だけでは、説得力はありません。最近夫婦共働きで、あまりないかも知れませんが、“子どもが学校から帰宅したら、お母さんが本を読んでいた”という姿は素晴らしいことだと思います。また、“お父さんは夕食後必ず一定時間本を読んでいる”、“山積みされているこの難しいそうな本は、お父さんが通勤しながら読んでいるらしい”などという姿は、必ずや子どもに影響を与えます。いつもテレビがついていて、大きな音が子どもの部屋にまで聞こえる中で、「本を読みなさい。勉強しなさい。集中しなさい」などと言っても、それは無理…というものです。『子どもに読書する大切さを伝え、喜びを教え、習慣化させること』少し努力して、家庭で環境を整えてみませんか

公文式について

公文式は、学年別・年齢別ではなく、個人別・学力別の学習方法なのです。

公文式の教材は、0歳相当から大学教養課程相当まで揃っていますから、その子が「らくにできる」ところがどの教科にも必ずあります。どんなに勉強したがない子どもでも、どんなに成績がふるわない子どもでも、または知的障害がある子どもの場合でも、公文式は、学年とは関係なしに、その子どもにとってらくなところから学習をスタートさせます。

数ある学習塾の中にも、「個人別・学力別」をうたっているところはたくさんあります。

しかし、その場合もせいぜい、学年より1~2年下の段階から始めるのがほとんどでしょう。

でも、公文式はもっと徹底しています。

中学3年生で数学が大の苦手なら、学力診断の結果、九九やたし算の段階から学習を始めることさえあります。

「自分の学年よりも低いところを学習させたら、子どもは劣等感を持ったり、やる気をなくすのではないか」と考える人もいます。しかし、現実とは違います。子どもにとって「自分の力でできる」ということは楽しいことです。

らくに楽しくできるから、もっとやりたくなります。

たくさんの学習量をこなすことができるようにもなります。

こうして公文式で、自分の学力の伸びにちょうど学習を着実に続けているうちに、短期間で学年相当のところまで追いつき、やがて学年以上の段階へと進めるのです。

そのとき、当然のことながら、子どもは「勉強大好き」に変身しているのです。

ただそのためには、家族の協力が抜かせません。

やる気を引き出すためにも、できないことを責めるのではなく、どんな小さなことでも、

できたことを笑顔でほめてあげてください。それによって、子どもはますますやる気を持って進んでいけるのです。

教室での決まりごと。

①はきものはきちんとそろえよう！

②あいさつは おおきなこえで はっきりしよう！

③もちものには なまえ をかきましょう！

④でんわをかりたら かならず でんわ代10えんいれてください！